

## 創造の原点と輝き



浅野忠利

### 第一回・はじめに

新自由主義と称して大きなうねりが起こり、破綻し、資本主義の存立基盤が危うくなっている。この一連のマナー・ゲームの顛末はますます混迷の度を深め、奈落の底にまっ逆さまという不安を抱かせる。その一方、皮肉にも、創造の尊さ、もの創りの価値を浮かび上がらせることになっている。資本主義はキリスト教信仰による禁欲・勤勉を絶対的条件としている。6世紀に創建されたベネディクト会の修道院で徹底して守られた『祈りと労働』の営みは、まさに禁欲・勤勉の実践であった。この禁欲・勤勉が創造の原点となり、20世紀においてなお、ベネディクト会は欧米文明の源として、ローマ皇帝から讃えられている。もの創りと資本主義は禁欲・勤勉の基本において軌を一にしていた筈である。獰猛で強欲なイスラエル民族やアングロサクソンなどのゲルマン民族が、自らの社会を成り立たせるために必要であった一神教キリスト教の教理では禁欲・勤勉が欠くべからざる掟であった。この掟を、マナー・ゲームにうつつを抜かしたユダヤやアングロサクソンの人々は完全に無視している。資本主義の破綻とか自壊とか崩壊などの言葉を耳にするたびに、これからの世界を、希望の見える形で提示する義務感と意欲に動かされる。欺瞞と謀略に満ちたマナーの世界から離れて、しばらく創造の世界を追いかけてみて、改めてマナー・ゲームを見直したとき、今後を明るく展望する可能性が見えてくることに賭けてみたいと思う。

今回の投稿の動機は建築に代表される創造の世界の著しい地位低下である。ここで私の知る限りの創造の輝きを、少しでも多くの方々と共有したいと考えている、その立脚点は二つ、一つは1961年早稲田大学建築学科を卒業し、(株)竹中工務店に入社して以来建築の世界に身を置いた者としての創り手の立場である。そして、資本主義を生んだとされるプロテスタント改革派の信仰を身に纏っている点である。加えて、与えられた機会を活かすために大切にしたい二つの体験がある。伊勢神宮とウルム造形大学の体験である。伊勢神宮では、たまたま中学、高校の先輩と同級生が続けて大宮司を勤めたこともあり、神宮の歴史と思想に触れ、神宮の領内に佇むものすべての美しさと成り立ちに創造の原点を見たことである。また、ウルム造形大学では、修道院、同業組合(ギルド)に連なるドイツデザイン運動の戦前戦後に亘る運動の終末に身を

おいたことである。

そこで、伊勢神宮の式年遷宮とベネディクト戒律の二つを起点とする創造の潮流を追いながら、創造の原点と輝きを、著すこととしたい。

### 第二回・伊勢神宮の式年遷宮に見る創造の原点

禁欲が創造の世界を支えている。伊勢神宮の持つ美の源には民族として自然に備わった禁欲がある。この禁欲概念がわが国の創造の原点となっている。

### 第三回・ベネディクト戒律が啓いたキリスト教文明

西暦529年は欧米文明の創造元年である。この年に、モンテ・カッシーノでベネディクト派の修道院が創建され、戒律による修道院の営みが開始された。この戒律により、欧米文明の基盤創りを担うこととなる修道士の育成が諮られた。

### 第四回・修道院の貢献

自給自足の修道院という小社会の中で、キリスト教信仰による厳しい鍛錬により、あらゆる事業を切り拓き、花を咲かせる能力を持った修道士が次々に生まれた。戦乱相次ぐ中、修道院は人材・知識・技術を育て、これを同業組合(ギルド)に引継いだ。

### 第五回・同業組合(ギルド)の誕生と闘い

領邦君主、工場労働者そして国家権力との闘いを通し、職業観を確立した。『共同体への奉仕を通して自己の自由を実現する』を旨とした。

### 第六回・都市国家の輝き

同業組合(ギルド)が欧州中世都市国家の中核にすわり、都市の運営に関わった。都市国家で同業組合(ギルド)は創造の世界を支配し、都市間の連携にも携わった。

### 第七回・宗教改革からワイマール共和国

宗教改革から、資本主義が巣立つ。産業革命や資本主義の混迷から、生活環境の向上のための闘いの中、ワイマール共和国が生まれ消えてゆく。

### 第八回・デザインを担う人々の自由

ワイマール共和国と運命を共にした20世紀最大のデザイン運動バウ・ハウスはナチの弾圧のため世界に散った。戦後バウ・ハウスを引き継いだウルム造形大学は官憲の手により退場させられた。高い次元の創造の世界のために、自由を求める闘いは続く。